

チベット軸装絵画の制作工程

小野田俊蔵（宗教文化ミュージアム館長）

宗教文化ミュージアムのエントランスホールの南壁面に小さなチベット式のカンバス（キャンシン）がずらっと並んだボードが展示されています。タンカと称されるチベット軸装絵画の制作工程を例示する目的で作られました。これらのタンカは、かつて大阪吹田の国立民族学博物館で開催された「大マンドラ展」の展示のために依頼され私が用意したものです。

チベット仏教絵画の製作行程を例示するために小さなキャンシン（張り枠）を並べて、時系列を追えるように製作行程を分断して描出したものです。もちろん、専門の絵師がこのような仕事をすることはありません。詳しくチベット人絵師の製作行程を見たい人は、宗教文化ミュージアムの前身のアジア宗教文化研究所が出版した David Jackson 著『稿本・チベット絵画の技法と素材』（瀬戸敦朗・田上操・小野田俊蔵共訳）とその付録の DVD をご覧になってください。





1) チベットの仏教絵画

チベットの仏教絵画は、伝統的に3つの主要な表現方法を採用します。すなわち、壁画・木版出版のための挿画・軸装タンカの3つの形態です。それぞれ作者の芸術的なセンスも異なりますし、技術面でも異なった技量が必要です。

タンカと称される軸装絵画は、さらにいくつかの形態に分類されます。主要な表現形態を列記してみると、ツンタン（画布に着彩したもの）、シンパル（主として布への木版印刷）、レントアップ（裂の縫い付け＝アップリケ）、レントプ（裂の貼り付け）、タクトップ或いはツェムトップ（画布に刺繍したもの）などです。この中で、着彩画はさらに細かくいくつかに分類されます。チュツン（一般的な多色の彩色によるもの）、ナクタン（全面の黒い下塗りの画面上に金泥や朱墨で線描したもの）、ツェルタン（朱塗りの下地の上に金泥で線描したもの）、セルタン（金泥の下塗り画面に朱墨で線描したもの）等々です。

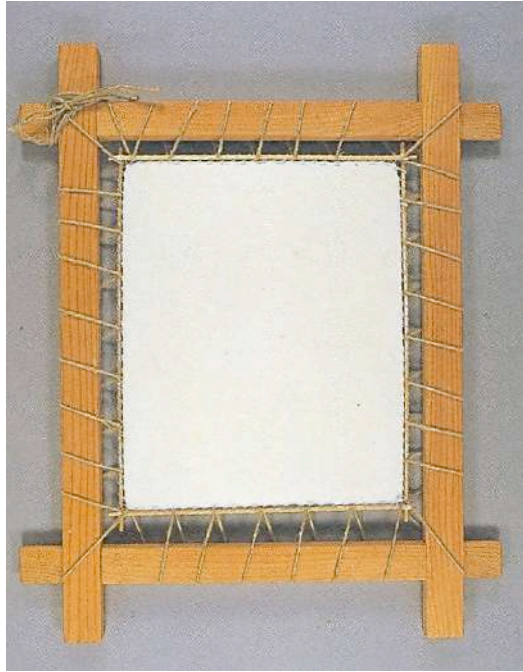
ここでは、それらの中のチュツン（多色彩色絵画）の制作工程の概略を例示します。ただし、伝統的なチベット絵画ではほとんど行われない無背景で提示してみました。制作過程の進展をより鮮明に示すためです。

2) キャンバスの作り方

1. 適当な太さの角材を組み、画枠を作ります。はめ込み式のものを作っておいて何度も利用します。
2. 木綿布を裁断し、綿布のほころびを防ぐための折り返しをレース糸と裁縫針を使って縫い付けます。或いは細い棒を添えて布端に縫い付けておきます。
3. 木綿布を画枠に張る為に、梱包用の麻紐を5メートルほど用意してその麻紐を太針あるいはその代用品（例えばヘアピンなど）を使って編み込みます。

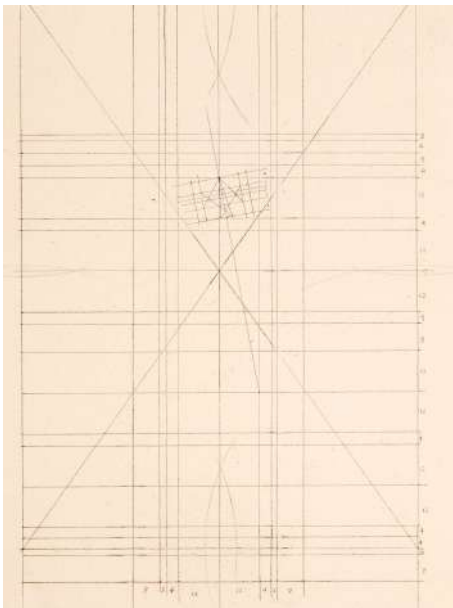
3) 画布への地塗り材の塗布と充填研磨

1. 白垂ないし胡粉50グラム前後を大きめの鉢に入れ、50ccほどの膠（にかわ）水溶液で溶かします。それをよくかき混ぜ、さらに50ccほどのごく薄い膠水溶液を足してゆるめます。地塗り材はじゅうぶんな膠分を含ませた後に、少し濃度を落として使用します。
2. 画布への地塗り材の塗布は片面ずつ行ない、乾燥を待った後に他方の面に塗布します。
3. 一度十分に乾燥させた画布を刷毛でさっと濡らして、乾かないあいだに表面が滑らかな堅石などで、堅く平らな台の上に圧迫してごしごしと擦ります。近年はガラスコップで研磨する絵師がほとんどです。
4. 片面の研磨を終えた後、もう一度紐を引き締め直します。
5. 完全に乾いたら反対面を研磨し、同様に引き締め直します。縦糸に沿って縦方向に研磨したら、次は横糸に沿って交互に2回以上繰り返します。画布を張り上げる際には、1本の糸に無理な力が懸からないように、布の縁を指でつまみあげながら糸を引きます。そのため、前述したように、張力の均等な配分のために細棒を添えて張り上げる絵師も沢山います。研磨台に密着する画布から地塗り材が剥離したり付着したりしないように研磨台は濡らさないように注意が必要です。作業は良く晴れた日の日中に行なうことが必要です。



4) 下絵と彩色

1. 中心水平線と中心垂直線を基準として身体座標の各数値にしたがいながら、画布上に基準線の座標格子を引きます。





2. テイクツァに基づき画布に藍或いは墨で下絵を描きます。多くの場合、鉛筆（昔は木炭）描きの上に墨で下絵が描かれます。下絵の線はあまり濃く描かないことも必要です。

3. 腰布の表面部分（今回の例では身光は省略していますが、身光を描く場合にはその身光内円部分）、そのほかに濃い口の岩群青を塗ります。

4. 頭髪を同じく濃い口の岩群青で塗ります。ただし、肩に垂れる頭髪がある部分でもこの段階ではまだ肩にかかる部分は塗りません。身色を塗りやすくするためです。



5. 宝石類のおよそ半分ほどを選んで群青で塗ります。

6. 天衣のおもて地を濃い口の岩緑青でべた塗りします。つづいて天衣の裏地を白群でべた塗りします。

7. 青と緑の色面が完成した後、赤系や黄系の着色をはじめます。宝石の残りに朱砂（ヴァーミリオン）を入れます。腰布の縁布部分を朱砂でべた塗りします。頭光の縁取りを淡口の緑青で塗ります。黄土を使って、金泥がくる部分を下塗りしておきます。腰布を黄色でべた塗りします。脚帯（脚絆）の虹色（黄土と浅黄と臙脂および白緑）を彩色します。身色の白は汚れを避けるためにできるだけ後まで塗らずにおきます。



8. 蓮弁および手に持つ花に朱を薄めた薄桃のぼかしを与えます。細部の描き分けは谷になる部分に濃い色をおき、ぼかしをひろげますが、この濃い色が接する部分、つまり山になる部分にそって白地のままの境界線を反射光の表現として残します。内側の花卉は最深部を臙脂色で強調します。花芯に濃い色をおき、そこからすぐに弱めます。つまり赤みがつよくなり過ぎないように注意します。

9. 白色の着色を残してそのほかの全色面がうまったら、剃刀の刃で画面全体を平らに削り落とします。とくにこのあと金泥線描がくるはずの衣や高配の群青や緑青の色面はもともと色粒が粗く表面が滑らかではないので、できる限り平らになるように凸部分をガリガリ削り

落としておきます。白色部分は削り過ぎると汚れてテカリがでてしまって落とせなくなるので大きな凹凸を削るに止めます。

10. 光を横からあてえて、たしかめながら繰り返します。凹みやムラは同一色で補筆して埋め、かならず乾いてから再度削り落とします。テカリは最終的には表面を濡らすことで抑えることができます。

5) 縁取りと輪郭線描

1. 葉っぱや頭光の緑青色面に縁取りや輪郭線描を施します。

2. 腰布など青系の色面に藍で輪郭線を入れます。同時に襷や折り目も描きこみます。さらに天衣や法衣の緑系の色面に藍で輪郭線を入れます。裏地の淡口の緑青面は藍を薄めて用います。

3. きめの細かい白で身色を塗ります。身色の白が接する部分（法衣の襟や胸元）の輪郭線はなるべく描き入れずにおきます。身色着色後は剃刀で表面を滑らかにしておきます。

4. 身色に重なる輪郭線を臙脂で入れます。裳こしに臙脂で線入れします。

5. 身体に弱めた臙脂で輪郭線を入れます。身色の上から、朱を薄めた薄桃と臙脂を混色した絵の具で隈取りします。



6) 金泥による金描

1. 装身具等に予め黄土で下地を塗っていました。その部分に金をべた塗りします。
2. 衣の緑や青の部分には、輪郭線の内側に金装飾線を二重に入れます。
3. 葉っぱの先端は金でぼかしをかけます。
4. 腰布の大面积に計画線を十字や×字に鉛筆などで薄く引き準備して、その線の交叉点に八吉祥紋などの図案を描きます。そして交点の図案の周囲を菱形に捉え、それぞれには強弱をつけます。ひとつひとつの形に拘らずに全体のバランスを最重要視してすすめます。衣の襷や折り目の部分には金欄模様を乗せないようにして効果をだします。
5. 裏当て板と瑪瑙棒を使って金泥地に研磨線描をおこないます。金に混ぜた膠が多過ぎると光りません。



7) 尊顔の描写

1. 臙脂でかすかに尊顔すべての造作を描き分けた後、上まぶたと眉を一旦白群で塗りつぶします。

2. 唇に紅をさします。
3. 白群で描いた眉と上まぶたのそれぞれの底辺に沿って藍で線描を加えます。
4. 瞳の外輪と瞳孔に藍をおとします。
5. 目頭と目尻の部分の白目部分に橙を加え、さらに臙脂を加えます。
6. 鼻筋、口元、顎に沿って、隈取りを描き、こめかみ、目尻、頬などにぼかしを施します



8) 開眼作法

裏からすかして眉間と喉と心臓の高さにあたりをつけて、真言を朱書きします。